第6回男子7人制世界選手権

特別座談会

遠征をふりかえる

●反省・教訓
●問題点
●欧州球界の実情など

出席者（敬称略）

団長　馬場太郎
監督　村田弘
コーチ　勝繁夫
コーチ　稲石三二
コーチ兼マネジャー　中沢重夫
聞き手・杉山茂（NHK運動部）

――皆さん、おかえりなさい。大変長い遠征でお疲れのこととは思いますが、本場のハンドボールの味がうすれないうちに、皆さんの見聞なさった貴重な体験を存分にお話していただこうと思いお集まり願いました。まず馬場さんから今回の遠征のアウト・ラインを話していただきましょう。

馬場　去年のくれもおしつまった12月28日の夜に羽田を発ち北極廻りでまいりましてパリ経由最初の訪問地ルーマニアのブカレストにつき、フインランドをまわって大会地のスウエーデン。そのあとスペイン、フランスを経て2月5日の夜帰って来ました。

――それでは順序をおってお話を聞かせていただくことにしましょう。まず今回の遠征メンバーの選出と決定はどういう方法がとられたのですか

村田　これは日本協会が去年の9月に「昭和41年度ナショナルチーム」として発表した28人の優秀選手の中から選び出したわけです。

――28人の中から遠征に加った15人はそうすると今回の役員のかたが選抜されたわけですか

稲石　リストアップされた28人のうち、世界選手権参加を前提とした9月27日からの第一次合宿（東京駒沢屋内球技場）に出た16人のなかから15人が行ったわけで、我々が選んだというわけでもありません。

勝　この合宿に28人全員が顔を出せばもちろん我々が中心になって選こうするというケースもあったのでしょうが、今回はそうでなかったわけです。

――この28人はたしか「ミュンヘン・オリンピック第一次強化選手」ということにもなっていたでしょう。

中沢　そうなっていましたね。

勝　中国戦（10月3日・対中国選抜・駒沢）も、世界選手権もオリンピック第一次強化の一環として行うという方針ですよ。

稲石　オリンピックに備えるにはどんなに早い時期でも〝早すぎる〟ということはないのだしこれはよい考えですね

馬場　だから第一次合宿は間近な中国戦それに世界選手権、そして遠い大きな夢につながる貴重なスタートだったと云えます。

――合宿は世界選手権に行くまで何回行ったのですか

中沢　第一次につづいて第二次を10月26日から3日間駒沢で、第三次を12月4日から1週間東京国立競技場内の体育館で行いました。

――その内容は

村田　第一次は先ほどお話しました通り中国戦を控えていましたし、それがおのずと目標になったのですが、第二次は個人ごとにトレーニングの目標とか、精神面での充実を強調しました。第三次は世界選手権に備えた外人対策というのでしょうか、脅の高いチームに対する策戦や、コンビネーション練習をくり返したわけです。練習時間は平均一日七時間でした。

――三回の合宿で初期の目的は一応は果されましたか

勝　御承知のように10月、11月には学生のリーグや全日本学生王座、12月には全日本選抜があるため選手たちを所属チームに返さねばならず、そうした日程のあいまをぬっていたようなわけでもっとやりたくてもその機会がなかったというのが実情です。

稲石　世界選手権の遠征が決まっている時はそのシーズンの日程を工夫しなければならないと思います。

村田　全日本チームをそのまま全日本選抜選手権に出すぐらいの考えがあってよいとも思うんですが、

――そうした今後への課題はあとで話しあっていただくとして中沢さん、スポーツマンの海外遠征の場合、関係官庁の手続きはどうなのですか

中沢　スムースですね。今回も特に問題はありませんでした。合宿地のルーマニアにもすぐ入れましたし……。

――最初の訪問地と外国での合宿地としてルーマニアを選ばれたのはどんな意味があったのですか

馬場　前に日本に来て親しみがあるということ（注・昭和35年にルーマニア選抜軍が来日＝11人制）、前回の優勝国ということ、それに今回も有力な優勝候補であったことなどですね

村田　それに大会で上位に進むにはどうしても共産圏諸国のカベを突き破らねばなりませんし、ラフ・プレーへのなれといいますか、そうしたプレーへの順応性をつけるためにもルーマニアを選んだわけです。

稲石　練習場なども比較的自由に使えたし、一ヶ所に落ちつけるのも利点だね。

中沢　強化合宿というか、本大会前の調整を目的にする場合は、やはり共産圏の国にかぎるようですね

――なるほど。試合もされたのでしょう

村田　3試合やりました。ナショナルチーム、学生、それにデイナモ・クラブというチーム。

勝　ナショナルチームとの試合はショックだったね。(笑)

――大敗だったわけですね

勝　9―34。まあこちらは着いて間もなくだったし、予想よりたたかれたのでこたえた。

中沢　私はそうショックではなかった。外国チームに初めてと云う若い日本チームが世界選手権チャンピオンチームを相手とすればこのくらいやられると覚悟していたもの。

村田　技術的な面でもたしかに得るところがあったが、それよりナショナルチーム同士の試合がいかに心・身・技充実したものであるかを若手を揃えた全日本が体験したのは無形のプラスだったと思います。

ともかく、相手が強かろうが弱かろうが疲れていようが何であろうが、ゲームに対する気力の充実には敬服しました。

稲石　ヨーロッパ選手のテクニックは話に聞いていたけれどフック・パスにしても片手で持ったボールを頭の後というより、首の後あたりからパスしたり、腋の下を通したり、足の間を通したりするパスをまのあたりに見せられて、これはエライことになったと思った。

勝　本大会前の相手の選びかたをそろそろ考えて出かけてもよい時期に来ているということにもなるネ

村田　そうだ。招待があればどこでも行くというのではなしにね

馬場　もっとも〝家庭の事情〟もあるから……(笑)

――ルーマニアでは、むこうのコーチに指導をうけたのですか

中沢　うけませんでした。ルーマニア球界あげて世界選手権対策に必死という時期でしたし、人ごとではなかったようです。

――ルーマニアのあとフインランドに寄られましたね

馬場　アジアから来たというので日本チームへの各国の関心は大変に高かった。フインランドのほかデンマーク、アイスランド、ノルウェーなどからも招待されていました。

決勝進出を目標にして

――それではいよいよ本番・世界選手権のお話をうかがいましょう。村田さん、出発前、今回の組み合せ(注・B組日本、西ドイツ、ハンガリー、ノルウェー)をごらんになって率直のところどのような感じでしたか。

村田　チームとしてはあくまで決勝トーナメント進出が大目標だったのですが西ドイツは日本ハンドボール界にとっていわば恩人国。ノルウェーは前回勝っているということで、この二つは精神的には何とかやれそうだという気がしてました。ただハンガリーは荒いという以外にデータがなく持てる力を発揮する以外にないと考えていました。

――ほかのかたは……。

勝　ノルウェーには意地でも勝たねばとみんな思っていたよね

中沢　行ったメンバーが若いというか新しい人たちが多かったのでどんな組合せになっても精神的な立ち場は同じだったでしょう。しかしノルウェーがいたことは、一つの目やすにはなった。

稲石　〝ぶつかれる〟相手が揃っていたという感じをいだいてましたね。

――ヨーロッパの専門家やスポーツライターたちのみかたはどうだったですか

村田　一番の注目は前回予想をくつがえしたということで日本とノルウェーの対戦に集っていましたね。

中沢　スウェーデンの新聞予想には〝日本奇跡をおこすか?〟なんて書いてある。前回ノルウェーに勝ったのは〝まぐれ〟という印象の方がヨーロッパのハンドボールファンには強いようなんです。

馬場　ヨーロッパ各国は始終地つづきと云う点も手伝って交流しているから日本に対する注目はよかれあしかれ濃くなるわけだ

中沢　注目している反面、強力視しているとも思はれない。

勝　「奇跡をおこすか」なんて云う書きかたはたしかにそうだね。それにスウェーデンはノルウェーに負けてるんだ。

中沢　前の時ノルウェーは完全に日本をなめていて、試合の前夜自動車で試合場に向かうようなことをしていたらしい。

村田　まあ今回もむこうの日本に対する評価はそれに大同小異だったのですが、第1戦ハンガリーとの試合後ガラッとその態度が変はりました

――それでは、そのハンガリー戦の話を。

攻撃多彩なハンガリー

村田　試合は前半14―16、後半11―14。25―30で負けたのですが終った時正直のところこれは思いがけない善戦といってよいと思いました。選手たちも前の日1時間ばかりハンガリーの練習を見て口にこそ出さなかったのですが〝これはやられるわい〟と思っていたに違いないのです(笑)

中沢　実はね、西ドイツは日本と当る時主力の一人か二人を休ませる予定だったらしいのですよ。それがこの試合を見ていてこれは大変だと急きよレギュラーメンバーで臨むことになったと云うのです。

馬場　むこうの国のそうした偵察活動は実に綿密ですね。ルーマニアに居た時、例のクンスト氏(注・昭和35年来日)に私が「ハンガリーの関係者がわれわれを見に来ているだろう」と問うたら、彼はニヤッと笑うんですよ。ともかく相手国の研究はものすごい。

勝　ハンガリー戦のあとのプレス・インタビューで日本はGKの起用を間違えたのではないかと盛んに聞かれました

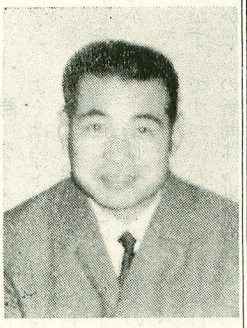
馬場　あれだけ素晴しい攻撃をみせて得点をとりながら負けたのはデイフエンス、それもGKの失敗にあるというんだ。

村田　尾形より竹下の方がよかったには違いないが、それは結果論ですよね。

キャリアなど総合力を考えて尾形の先発は当然だし、一番の敗因は後半襲はれた〝へばり〟です。

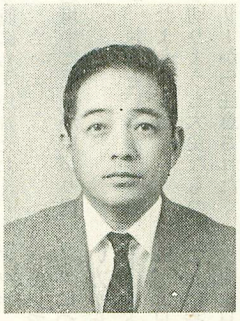
へばったためにメンバーを代えた、そうしたところが攻防両面で組織的なチームプ

馬場団長

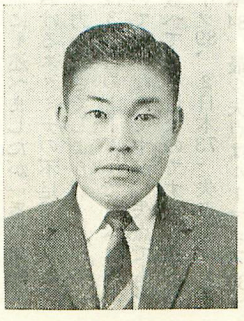


村田監督

勝コーチ



稲石コーチ



中沢コーチ

レーが出来なくなりそこを突かれてしまったのが結局〝5点差〟になって現れてしまったのです。

稲石　7MTを7本とられ、そのうち5本決められたのも痛かった。また攻撃の時も守備の時もやたらにライン・クロスをとられたね

――レフェリングにまどわされたわけですか

村田　いやそうではないのです。やはり、むこうの体力に押しこまれてしまうケースが多かったのです。

レフェリーはハンス・カールソンさんと云ってスウェーデンで最も古いキャリアを持った人でした。

この人が実にうまい。レフェリーとはこういうものだという手本みたいなもので、なんとも云えぬ威げんがある。

稲石　あの人はスウェーデンで最優秀のレフェリーだそうです。私も何度か会ったんですが右手が義手なんですね。こういうレフェリーに第1戦であたったことが西ドイツ戦、ノルウェー戦でずいぶん役立ちました。

村田　大会後、最優秀レフェリーとして表彰もされましたよ。

勝　私はこの試合評を「ハンガリーの多彩な攻撃の前に精いっぱい」とメモしたのですが……

中沢　まったく同感だね

――ハンガリーには目新しいテクニックはありませんでしたか

稲石　私はとりたてて感じませんでしたね。全体のもってる〝たくましさ〟は別として……

巧技、流れいな西ドイツ

――次の西ドイツ戦は前半12―17、後半15―21と云うスコアだったのですが、ドイツはレギュラーで臨んで来たわけですね。

稲石　得点王になったルブキングも出てたし……彼に10点とられた。ともかくすごい選手だったね。準々決勝のソ連戦でハーフ・ラインから一気に走って三人のマークを抜いて得点したような選手なのだから……。

でも全体からうける印象としてはこわいチームではなかったな。

勝　きれいにまとまりすぎているというのかナ

稲石　6―3とリードしたあともう1点加えるチャンスを失ったのが痛かった。

村田　こういっては失礼だけど西ドイツは〝勝つハンドボール〟を知らないという感じでしたね。うまさが際立ってしまって精神的な面で共産圏に比べて何か足りない。

人間と人間のせり合いに勝つというところに欠ける。

中沢　しかし、前に私が行った時は、流れいさではスウェーデンが抜群でしたけれど、今回は西ドイツが最右翼でした。

村田　フエア・プレイ杯というのを受けましたね。西ドイツは。

――今秋西ドイツチームが来日するそうですが楽しみですね。ところで日本チームの試合ぶりは……。

稲石　リードしていても何時かひっくり返されるという不安がはなれなかった。

馬場　優位に立ったあとペースを変えることが出来なかったのも敗因だと思う。

村田　ストーリングをとられたのが精神的にひびいたとも思います。

稲石　あれは30秒間ぐらいしか廻していないのにとられちゃった。

村田　ペースを誤ったというのはやはりベンチワークの拙さでもあるわけです。それにハンガリー戦と同じような〝へばり〟が敗因と反省してます。後半15分頃からどうしても乱れが出てしまうのです。総合力の差という感じです

後半になって精いっぱいな体力を通りこして〝へばり〟が見えた時、メンバーを代えるわけなのですが、それが結果的に〝乱れ〟につながる。やっぱり疲れてもそのまま押し通す方がよいのかなと思うのですがね。今になると。

――選手層ということですか

村田　そういうわけでもありません。つまりメンバーをくり返しくり返し代えていくうちに〝組織〟がどうしても崩れちゃうのです

――日本の国内試合のレベルならそれでも充分通用するのでしょうが、ヨーロッパのナショナルチームともなれば、そのスキを突破口にしてカサにかかって攻めこんで

来るでしょうからね。先年来日したステラでさえそうした試合展開を見せていたんですから……。

稲石　選手交替の〝間（ま）〟のむずかしさです。

――へばるのが敗因とおっしゃるが、それをもう少し分析していただけませんか。

稲石　たとえば日本選手が攻めて行っても彼らの体格、リーチではほとんど動かずディフェンス（マーク）出来る。それが逆の場合だと相当動かないとマークし切れないというわけです。

中沢　オフェンス、ディフェンスともにものすごいスタミナがかかる

勝　云い古された言葉だけれど彼我の体格差は誰しも認めるところだろう。しかし吾々としてはスタミナの配分を考えればもう少し何とかなったんじゃないかな

日本選手は身長はあるのだけれどキャシヤなんだ。

高校生と大学生の試合と云う感じです。

中沢　これはうまい表現だ。その通りだと思う。日本選手は重量感に欠ける。たくましさ、どっしりさね。

村田　結論づければ日本選手は体力も持久力もヨーロッパ選手にそう見劣りがしなくなった。ただゲームに於けるスタミナにおとるということです。

中沢　攻防両面での瞬発力。

馬場　さっき選手層ということばが出たがやはりそれも見おとしてはいけない。8人目、9人目の選手はレギュラー同等、それ以上の力がなくてはダメだ。

――なるほど〝へばり〟と云う言葉のニュアンスが判りました。この試合も終ったあとプレス・インタビューがあったのでしょう。

勝　ライターや役員たちは日本を非常によくほめてくれました。西ドイツ側も日本チームの速い動きはすばらしい。われわれも勉強したいというんです。

――日本チームの動きのこまかさ、速さは定評があり、ヨーロッパでは驚異らしいですね。先年、女子の全日本をヨーロッパの新聞は〝東洋の密ばち〟と名づけたのですが、今度はそういうことはありませんでしたか。

馬場　なかったようですよ。余談になりますが日本の女子の評判はヨーロッパで相当高いです。

自信にあふれたノルウェー戦

――まあ、ハンガリー、西ドイツと善戦しながらも連敗して宿願のベストエイト入りは空しかったのですが、最後のノルウエー戦。これに話を進めていただきましょう。

勝　これはもう勝つつもりでいたから（笑）

前夜のミーテイングでも〝勝ち策戦〟ばかりでしたよ

中沢　それまでは〝善戦策戦〟どまりだったからね。監督、コーチ、選手のムードが一致していた。

勝　やはりハンガリー、西ドイツに善戦したことが大きく作用したわけです。

稲石　西ドイツの時とは逆で、ベンチにいても負ける気はしなかった。

村田　総合力でも〝いける〟自信はありましたし、前に勝ってる所に負けてなるものかと……（笑）

稲石　すべてが積極的だった

村田　そうね。後半なかば江名が5分間の退場をくっている時にも1点加えたくらいだもの。

勝　逆に相手は退場中に傷口が広がり退場の明暗が出たな。

――目信というか、執念というか。景気のいい試合ぶりだったようですね

勝　ベンチの張り切りようも大変なもので騒ぎすぎてレフェリーから注意されたくらいだ（笑）

中沢　ノルウエーはあまりにも雪じよくしようと云う気がありすぎて、それがかえってマイナスになっていたようでした。

――策戦的には

稲石　ディフエンスをさげたことぐらいかな

村田　選手たちも前の2試合で点はとれるのだからとられないようにすることだと判ったわけです。それとふりかえってみると尾形はこの試合が一番よかったですよ。GKがよいことはやはり勝つために欠かせぬ条件だということがよく判ります。

中沢　7MTを4本止めてるものね。

馬場　プレス・インタビューでノルウエーの役員は、飯端と木野をマークした。けれども結局彼らにやられた（注・木野9点、飯端4点）といってましたそして前回、今回とつづけて負けたけれど次には絶対勝つからとわざわざつけ加えて帰りましたよ（笑）

守備力の弱さを反省

――日本チームの3試合を総合的に反省していただくことにしましょう。

村田　前にも述べましたが一番の欠陥はゲームにおけるスタミナの不足、それとディフエンス力の弱さでしょう。

得点では3試合のトータルで日本は西ドイツについて2位なんですが、失点でも多い方から数へて2番目なのですよ（注・得点①西ドイツ89、②日本73。失点①カナダ92、②日本84。最少失点はルーマニア30）これはやはり反省しなければなりません。

――具体的に御指摘下さいませんか

村田　フットワークと「構え」ですね。「構え」というのはもちろん動作もそうですが、精神的な面でも欠けているといってよいでしょう。

そのためプレー面で、ボールを遊ばせすぎることになるのです。

稲石　フリーにさせすぎるんですよ。だから自由に切りこませてしまったり、フオローされたりしてしまう。

勝　自分のマークに対しての責任感が以前よりうすれている。

稲石　7人制になってから特にそうなりました。11人制の時は抜かれたことがはっきり出るが7人制はカバー出来るため〝罪意識〟がない。

中沢　そうした意味から云えば日本のハンドボール界は、ここらでもう一度あの11人制時代のスケールの大きい練習や試合精神をふりかえるのも意味のないことではないと思います。

――基本技の勉強ですね。練習法の再検討ということにもなりはしませんか。

村田　日本の練習はバラエテイに富みすぎるのです。変った練習をすればうまくなる、強くなると考えてる指導者が多いので

はないかと思う。

中沢　小手先のテクニックに走りすぎるのでないかな。

村田　選手自体に根気がないのも問題だ。

勝　基本技といってもいろいろあるわけですぐウサギトビや腕立て歩行を連想するがそれらは基礎体力づくりだ。そうではなく、いわゆるチームプレーとしての基本技ね。たとえば速攻の基本、セットオフェンスの基本というものを教えることが指導者としては大切だし、第一歩だ。今度の大会でも外国の優秀選手というのは結局基本の出来た選手だという結論ですね。

――ディフェスのもろさが欠点と云うことにまとまりそうですが、そうなるとオフェンスに関してはかなり自信をもってよいということになりますか

村田　よく点をとった原因を一言で云えばプレーにスピードがあったからです。

第3次合宿で小さいリターンパスプレーを徹底的にやったのですが、それが成功して威力を発揮したわけです、日本なりに考えた攻撃法で成果をあげたということは今後の発展へ一つのステップになったとはいえるでしょう。

馬場　日本のスピーディな攻撃には拍手も多かったし、たしかに外人対策としてはよい手段だと思う。

しかし、スウェーデンのある役員が、日本選手の攻撃時のアーム・スイングは18年前の型だと云うんだ。

18年という根拠はどこにあるのか知らないが、私自身も、それと少々ニュアンスはちがうがそんな感じを抱くな。ボールを持った手を後に引いて放すのではなく、ボールの位置はむしろ動かさず、体を前にもっていくべきなんだ。

ボールは片手で握れ

稲石　それとボールを片手で握れるようにする訓れんが必要だ。日本人でも一七八センチ以上の選手は必ず出来るのだし、握ってパスすることを徹底さすべきですよ。

――習慣づけるわけですか

稲石　そうですよ。ルーマニアやフランスで小さな子のハンドボールを見てたらみんな片手で握っている。よく見たらボールが小さいんだ。つまり、体に合はしたボールを使って握ることを体におぼえこましているんだね。日本でも教育用の何号ボールといったサイズの異るボールを年令に応じて使わしたらいい。

勝　しかし、それになれすぎて大きなボールになった時こまりはしないかナ

中沢　そういう心配もあるが〝握る〟〝握れる〟という感覚をうえつけることにはなるだろう。

村田　稲石君の云うように技術はある程度までは練習でマスターできるでしょう。

馬場　ここで考えてはいけないのは、彼ら（外人）の身長が日本人と同じでもキャバァシテイがどうしてあのように大きいのだろうかということだ。彼らはどういう生活をしてリストを強めハンドリング・キャバァシテイを大きくしているのだろうか。

野球のバットを握るにしても、キャッチボールをするにしても、ハンドボールでもあるいは水泳でも手が広く大きくなければいけないことは判り切ったことなのです。

これは今後、日本のスポーツ界にとって大きなテーマとなると思いますよ。

稲石　キャッチングの時でも手を「ハの字」のようにしてとらず、なにかはさみつけてとるというような感じですね。

――シュート力はどうですか

村田　練習の時にシュートがゴールポストに当たってはね返ったりするのは日本チームだけなのですよ

どういうわけかというと、シュートそのものに破壊力がないからコントロールでそれを補おうとしてギリギリを狙うからです。

これは悪いことではないけれど、やはりシュートそのものに鋭さ、迫力をつける必要はありますね。

――策戦とか試合展開での反省はありませんか。

馬場　GKからのパス・アウトで一気に得点することが難しい。

稲石　ともかく〝戻り〟が速い。まわりこんで待っていることさえある。

中沢　長いパスより短いパスを早くつないで行くべきだね。

勝　日本では一気のパスで通用するためそのつもりでやるとダメだ。

馬場　デンマークなんか出したらいいなと思う時も短く渡していた。安全第一なんだ。

村田　そうしたことも結局は個々のプレーの展開のよみの深さ、それに伴う瞬発力にあると思いますよ。

――キャリアの差ですか

村田　その一言で片づけてはいけないと思うんです。

馬場　展開で思い出したが、日本チームは最初の試合から最後までほとんどその攻撃や守備の型が同じだった。

中沢　北井と近藤が両サイドに江名と近森がWポストでこの四人でひっぱったり、クロスしてかきまわしたりしてディフェンスをゆさぶり、木野と飯端に対するマークの詰めのチャンスを与えなかったという戦法が常とう手段でした。

勝　木野と飯端の二人に片寄ったオフェンスだったことは認める。

稲石　でも二人が思い切って射ったのはよかった。

村田　その二人を助けた全員の動きというのはやはり見逃せない。外国には大きいセットプレーというのはありませんね

中沢　日本のあげる1点は、つねに全員が関係して生んでいたものね。

馬場　どのポジションに誰がいても同じように動いて、同じように射てるというバリエイションの研究が今後の課題だと思うな。

――そのほか何かありませんか

馬場　コートは40×20が採用されていたね。

稲石　40×22なんてないのですよ。

中沢　フロアに余裕があっても40×20だし、それが常識になっている。

だからサイドのセットオフェンスという戦法が少ない。

馬場　20と22では相手がでかいだけに感じはさらに違う。

でもミュンヘン・オリンピックの時はどうなるか判らないのだから、国内で規制す

るのは早計かもしれないな。

バランスのとれたチェコ

――目標のベストエイト入りを目前にして敗れただけに反省の材料はたくさんあるでしょうが、ベストエイトの壁というのは相当厚そうですね。決勝を中心にして上位各国の試合ぶりを聞かせて下さい。

村田　今度大会の事実上の決勝は準決勝のチェコ対ルーマニアだったと思います。

勝　デンマークの決勝進出は予想外でしたね

中沢　だから決勝のチェコは最初から強気に出て、結局最後スタミナの差で押し切っちゃいました。ふつう決勝で前半8―8なら慎重に出るのを後半もまた強引な戦法だった。

勝　しかも前半はどちらかといえばデンマークが押し気味だったんだから……。

――チェコの優勝は順当というわけですね

稲石　総合力でやはり一番でした。攻守のバランスがいい。

中沢　そんなに大きな連中はいなかったが一七七、七八あたりを揃えていた。

村田　以前からその実力は買はれていたのだし「初優勝」というのがおかしいくらいでしょう

――デンマークの進出は意外とおっしゃいましたが、勝ち抜いた因はツキだけではないハズですが

稲石　GKがよかった。

勝　うまかったねえ。

村田　ホルストというのですが優秀チーム（ベスト・セブン）のGKに文句なく選ばれている

稲石　けたはずれだったな。全身使って防ぐ。顔までね（笑）。身長は一九〇ぐらい。しかも巾があるし……。

馬場　軟かい体をしてスライデイングキヤッチも見せた。抜群だったよ彼は。

村田　それGKとバックスの連けいがうまいのだからあそこまで行っても不思議はない。失点の少いのはルーマニア、チエコ、デンマークの順でしたね。

中沢　ルーマニアは新・旧交替期のようだった。

――ソビエトの評判も高かったでしょう

勝　力はありますね。デイフエンスで徹底したマン・ツウ・マンを布くなどユニークな試合ぶりでした。

稲石　デイフエンスはたしかに各国とも多彩で、日本はこの面では立ち遅れを否めません。

馬場　日本のトップチームである勝君のところだって、中沢君のところだってそれにはあまり時間をかけていないだろうからね。

村田　注目してよいのはデイフエンス専用選手が上位国に共通して居ることです。

稲石　しかも彼らの攻守交替は実に敏速だ。

――ベンチからのですか

稲石　そう。

村田　大会後ベストセブンに選ばれた中でもチインデマン（東ドイツ）、マーレス（チエコ）、ソロンムコ（ソ連）などはデイフエンス・プレイヤーですよ。チインデマンはこれまで93回も国際ゲームに出てるベテランで専問誌でもよく見る名ですね。防禦の秀でた選手はそれほど体が大きくない。一七〇から五ぐらいの間だ。

馬場　そうした守備の達者な連中によっていわゆる指定法という特殊なマン・ツウ・マンを布くのが特色だね

中沢　相手の強力シューターを徹底的にマークするやりかたでデイフエンスはそのつど多様に変化する。

馬場　アサインド・マン・ツウ・マンと呼ばれる戦法だ。

稲石　でも、前にも話したが西ドイツのルブキングはそうしたマークをさらにはずしてシュートにもってしまうのだもの上には上という感じがしたな

村田　攻撃だけとればルーマニアのグルイヤーもよかった。一九〇センチ、左きだった。でもこの人はデイフエンスが拙い。

――特定選手へのマークのほか、いはゆるプレス・デイフエンスも流行しているのではありませんか

馬場　ソビエトがそれに近い。

村田　話がちよっとそれますが、チームとしては予選で負けた東ドイツがよかったですね。

馬場　ルーマニアとC組で引き分けている。68年か69年に来日したいと云っていた。

――チエコ、デンマーク、ルーマニア、ソビエトそれに今の東ドイツ。ここらあたりに日本が近づくのはまだちよっと時間がかかりそうな感じがしますが、昨秋日本に来た中国がもし出たらどの位でしよう

中沢　ベスト・エイトはむずかしい10位以下かな。

稲石　日本だってあそこ（中国）にはもう一度やれば負けないよ。

多彩な欧州の攻防技術

――フオーメーションはどうですか

勝　デイフエンスは一線（0―6）と1・5だね、ほとんど。

中沢　そこから臨機応変する。

馬場　それと前に話した〝指名手配〟。

稲石　オフエンスはすべてセットからの変化でした。

村田　変化が文字通り自在なのです。ポスト・マンの動きもめまぐるしく前後・左右にかわるし、パスのボールも体のあらゆる部分から出てくる感じだ。

稲石　ポスト・マンが相手のデイフエンスの網の中をダッシュで動くのはすごい。

勝　それを利用したブロック・プレーの強さも特色ですね。

稲石　ボデイチェック。左肩で押して来る。

――サイドからの攻撃は

中沢　ほとんどなかった。中央に集中している。これはやはり40×20のコートの影響でしよう。

――身長とポジションの関係はどうでしたか。

勝　デンマークのポスト・マンは一七〇足らずだった。しかしシューターはでかい。

村田　チエコは決して大きくない。平均身長一七七ぐらいではないか

稲石　大きかったのはルーマニア。一九八、一九六と二枚揃えてた。

中沢　GKではソビエトなんか一六八しかないといってたよ

稲石　しかし巾が違うからな。

馬場　それと日本人は昔から足腰が強いとかいっているけど最近は必しもそうではない。

これは日常生活の変化によるもので、ウェイトトレーニングの必要性を感じるね。昔はウェイトトレーニングをしなくても生活が自然にそうなっていたんだ。

村田　ヨーロッパのチームをみていて二つのタイプがあると思った。

一つは「北欧型」で長身でポストプレーにたよりすぎる。そして粘りがない。

もう一つは「東欧型」。これは粘り強く動きにスピードがある。

――東欧諸国が世界ハンドボール界の主流になりつつある一つの裏付けですね。「日本型」はどうでしょう

馬場　スロースターターだ。どうしてそうなるかというと外人なれしていないため、どうしても始めのうちは気おくれがしてしまう。

中沢　技術面より精神面の問題といえる。外国の選手はやはり個々の自覚というものが非常に強い。

――日本チームの評判はどうでしたか

馬場　マナーのよいことを皆からほめられました。スウェーデン協会の連中はそれを非常に感謝してくれました。技術的には日本は大会のたびに進歩すると驚きの目で見たようです。特にこれはスポーツライターの共通したみかただった。

関心日本の野球なみ

――世界選手権への関心、大会の運営はどうしたか。

馬場　関心はやはり相当高い。日本の試合でも二千人近く収容する体育館は立ち見席までギッシリだし、決勝トーナメントも地元がすぐ負けて人気がおちると想ったが平均六千人は入っていた。

――決勝は

村田　これはすごかった。一万八千入る体育館がスシずめでした。

一般ファンがプレーを非常に深く知っているから零囲気も盛り上りますね

勝　審判のちよっとしたミスや荒いプレーにはワァワァ騒ぐ

中沢　日本の野球に対する関心と同じですよ

村田　運営で日本でも採り入れたらよいなと思ったのは、前半と後半サイドが変はると同時にベンチも移るのですよ。

勝　つねにデイフェンスサイドに座ることになる。

中沢　会場のつくりかたはお客さん本位で、出場選手といえども大きな顔してスタンドには座れない

稲石　選手用の観らん席はつねにゴールうしろだったね。

――全部夜の試合でしょう

中沢　予選は各地に散ってやったが、各会場夜の7時半に一斉にスロー・オフです。勤めを終はってさあハンドボールでも見に行こうというわけでしょう。

勝　外国に行くと開会式なんかがあっさりしているのはいいね。

村田　世界選手権もゲーム一本というやりかたでした。日本のセレモニイは運営者の自己満足という感じが強い。

――まったくセレモニイはないのですか

村田　第1日の前夜、市庁舎のホールでジュースやシャンパンなどの出るなかでプレジデントが挨拶しただけです。

ちっとも形式ばってないのですが、それでけっこう荘厳さもある。

――開会式もそうした調子ですか

村田　決勝が終はると同時に観衆がコートにおりて選手たちをとりかこんでしまい、何時やったのか判らないうちに終ったようなわけです。

馬場　メダルを一人一人渡してはいたようだったよ。

――待遇はどうでしたか

中沢　費用は大会前夜から敗れた翌日の朝食代まで開催国もちなのですが、食事は栄養にずいぶん気をつかっていたようですし、ある程度は注文にも応じてくれて上々でした。キルナでは大学の寮に泊まり、ルーレオでは超一流にランクされるホテルに泊まりました。会場までの送迎はバスが用意され、そういう点はキチンとしてましたね。

勝　記録の発表も早かった。ハーフタイムに各会場の前半のスコアが発表され試合を終はるとすぐに自分たちの記録が渡される。

――報道関係者にはありがたいことでしょうね、それは。

馬場　そうですね。そのせいか新聞、テレビ、ラジオの取り扱いもなかなかのもので、第1日に12点をかせいだ飯端などずいぶんクローズ・アップされたようです。

日本の審判判定正しい

――世界選手権のお話はそれではこのぐらいにしてヨーロッパの審判、というよりもルール解釈について次にお話願いましょう。

村田　全般的な傾向としてはラフなプレーを放置しているのは遺憾だということです。

そのため世界選手権の前の打ち合せでそうした粗暴なプレーに対しては厳格にジャジすることを申し合せました。これは日本にとって、助かりました。

勝　たしかにその点は統一されていた。

村田　しかし、体格の違いから来る解釈の相異はありますね。つまり外国選手はボールを握れるし、日本の選手が少しぐらい押しても落とさない。ところがその逆の場合はすぐポロリとやる。そこのところが微妙だ。

――外人同士の場合少々押しても平気だが、同じパワーで日本が押されたら相当なダメージになるわけですね。

村田　ただし日本のレフェリーソサィエティが自信をもってよいと思うのは現行の解釈で判定基準はまちがっていないということです。

――こまかい点については稲石さんがだいぶ取材なさっているようですのでお話いただきましょう。

稲石　例のカールソンさんやＩＨＦの人たちから聞いた話をそれでは話しましょう。

①　選手の交代はルール通り

②　ボールに対する扱いのうち、キツク

とジャツグルはルール通り。
特にキツクは相当こまかくみて「さわった」感じでもとる。
③ サイドアウトとゴールアウトはホイッスルを吹かない。
④ ゴール前フリースローで、攻撃側選手がフリースローラインの中に残っていても、意識的なものでなければ反則としない。ただし、ライン外に出ようという意志（動作）を必ず示すべきだと云ってます。
⑤ 7MTはシュートチャンスをつかめなかった時だけに適用する。
日本の場合、そうでなくても粗暴だと懲罰的に7MTを課すし、センターラインあたりで独走態勢に入った相手に荒いプレーをかけると〝拡大解釈〟して7MTにするがこんなことはない。その場合は退場だけです。
⑥ チャージについては「チャージはチャージ」という見解です。
⑦ ディフェンス側がラインクロース（両足）した場合の7MTはきびしかった。「踏んだ」感じでもこれはとる。

稲石 いちばん問題なのはストーリング。これはヨーロッパでも現在一番の難題だといっています。

村田 日本では試合の後半、逃げ切り策戦と見た時によくそれをとるが、むこうではそうではない。

稲石 スロー・オフ直後それをとっているケースもあった。

村田 大会前の打ち合せでもこの問題は大論議となり将来は、はっきり「時間規定」を設けるべきだという意見が支配的だった。

稲石 反則退場については
①注意、2分間、2分間、残り時間。
②注意、2分間5分間、残り時間。
③注意、2分間、5分間、残り時間という三つのケースがあって、必ずその段階をふまなければならない。
つまり、いきなり2分間退場もしくは5分間退場、残り時間退場はないわけです。
①②が多く③はほとんどない。

村田 ゴール前のフリースローの位置は実に厳格だ。

稲石 これはきびしい。それとフリーローの場合笛を吹かなくなったが、ボールを持ったプレイヤーが立った動作ですぐ投げないようなら笛を吹いて催促する。

——ルール改正はありそうですか。

村田 少くとも42年度（一九六七年）はない。24年9月の世界審判会議であるいは43年度から若干変はるところが出るかもしれない。副審制、女子の試合時間延長（注ハーフ25分案）などが話し合われるでしょう。

——そのほか審判で気のついたことは。

村田 練習試合でも、少年のゲームでもつねに正規の服装をしているのは見習うべきだ。

稲石 しかも相当優秀な人がそうした試合を吹いている。

異常な熱気の欧州各国

——ともかく、そうした長い旅程で無事帰国されて試合成績は世界選手権の1勝2敗をふくめて17戦10勝7敗ということになるわけですが、最後に一言づつ今回の遠征で得た教訓をお話していただきましょう。

馬場 ヨーロッパ各国ハンドボール界の熱気は異常な高まりを見せています。日本もこれに立ち遅れてはならない。オリンピックへの強化方針を早急に打ち出すべきことを切実に感じました。
それと、どこの国に行っても試合は夜で、終ってからシャワーにかかり、ホテルで服装をととのえてレセプションに出て戻ると翌朝の二時頃になってしまう。そのため生活がすっかり狂い、選手もそれになれるのに一苦労した。こうした面を乗り切るたくましさをもっと植えつけねばダメですね。

村田 「心がまえ」がすべてだと思いました。シュート一つにしてもです。
私たちを含めて今回の遠征でみんなが、外国の選手やチームの持つしっかりした心がまえを見聞出来たのは大きな収獲と云えると思います。
それに古い時代はスポーツは参加することが意義といって通って来ましたが、現代はスポーツとは〝勝つこと〟に変わって来ました。「参加して勝つ」ということになりますね。

勝 村田さんの意見と同じですね。
試合だけではなく、合宿からつねに〝勝ち策戦〟で向かうべきです。そうすれば遠征旅程、練習相手の選択も変わって来るでしょうし……。
また敗因として考えられるのは、結局、大きい選手にふなれだったことでしょう。
しかし、それも相手だって小さな日本人にはなれていないのですから弁解にすぎません。なれてくれば勝てるでは進歩がありませんから、徹底的に基本からやりなおせるような強化方針を考えるべきでしょう。

稲石 外人に対する精神的なヒケ目をとり払うことですね。街などに出て横文字が並んでいるのを見たり、英語ばかり聞かされるとわれわれだけ小さく固ってしまう。
そうした面をいかに越えるかで、道が一つ開けると思います。

中沢 理想論かもしれないが、なるべく大人数で行くべきです。選手16人以上そしてGKはどうしても3人欲しい。選手16人のうち11～12人がレギュラーで残りは即戦力にならなくても〝次代の選手〟でいい。そして、それらの人にマネージメントも手伝ってもらう。ヨーロッパ各国の代表団は平均30人はいる。もちん視察員、ドクター、フイルム撮影者などまでいれてだが……。

村田 コーチが試合もみる、フイルムもみるというのは不可能に近い。

馬場 今回の遠征で日本の力があがっていることが自他ともに認められたのだし宿願のベストエイトに進出する突破口をある程度見出して帰国できたことはよかったと思うのです。
あとはこれをどう伸ばしていくかが問題となるわけでそのためには、われわれも努力を惜しまないつもりです。

中沢 世界制への道はけわしいが〝強気で行け〟と声を大にしたいですね。

——今、馬場さんのおっしゃいましたことを〝結び〟とし、日本ハンドボール界の国際的な進出に多大な期待をかけつつ、この座談会を終はりたいと思います。
お疲れのところ長時間にわたってどうもありがとうございました。

（おわり）

国　際　試　合　成　績

（※印は世界選手権　N印はナショナルチーム及び国際公式試合）

昭13. 9	日　　体	○19—6	H・ユーゲント	（神宮）
昭15. 6	日本(日体)	○ 8—5	在日独人	（〃）
	日本(日体)	○ 8—5	在日独人	（橿原）
昭17.11	全日本学生	○ 8—7	訪日独艦隊	（神宮）
昭18.12	全　日　本	△11—11	在日独人	（〃）
昭31. 9	全日本学生	● 8—19	西ドイツ選抜軍	（横浜）
	全　東　海	●13—24	〃	（瑞穂）
	富　山　ク	● 9—21	〃	（富山）
	全日本N	●16—27	〃	（大阪）
	全　九　州	● 6—22	〃	（八幡）
	全　山　口	● 5—14	〃	（宇部）
	関東学生	●10—18	〃	（甲府）
	全日本N	●12—28	〃	（後楽園）
昭35. 6	全　早　大	● 4—19	ルーマニア選抜軍	（小石川）
	全　中　大	● 7—28	〃	（〃）
	全日体大	●11—18	〃	（〃）
	全　群　馬	●11—24	〃	（桐生）
	全　愛　知	●15—23	〃	（瑞穂）
	全　関　学	●11—19	〃	（西宮）
	全北海道	● 7—27	〃	（函館）
	全　仙　台	● 5—18	〃	（仙台）
昭35. 7	全神奈川	● 6—23	〃	（横浜）
	全芝工大	●16—17	〃	（小石川）
昭36. 2	全日本男	●18—36	フランス軍隊	（仏）
	〃	○27—21	リヨン	（〃）
	〃	○22—18	アルザス	（〃）
	〃	○23—21	ロレーヌ	（〃）
昭36. 3	〃	※●10—38	チェコ	（西ドイツ）
	〃	※●11—29	ルーマニア	（〃）
	〃	△30—30	ハイデルベルグ	（〃）
	〃	○28—27	グンメルスバッハ	（〃）
	〃	●16—25	ゾーリンゲン	（〃）
	〃	○30—22	ギーセン	（〃）
	〃	○13—12	フランクフルト	（〃）
	〃	○13—12	マインタウンス	（〃）
	〃	N●20—37	チェコ選抜	（チェコ）
	〃	△20—20	北ボヘミアン	（〃）
	〃	●23—29	モラビア	（〃）
	〃	●13—31	東スロバキア	（〃）
	〃	●21—25	西スロバキア	（〃）
	〃	○24—22	ステラ・クラブ	（フランス）
	〃	○26—20	ノルマンディ	（〃）
	〃	●20—22	デジョン	（〃）
	〃	○33—15	ブルゴーニ	（〃）
昭36. 4	〃	N○16—15	イスラエル	（イスラエル）
	〃	○23—8	ハポエル	（〃）
	〃	○22—10	マカビ	（〃）
昭36.10	日　体　大	○22—7	慶應大	（京城）
	〃	○22—6	成均館大	（〃）
	〃	○26—10	慶北大	（大邱）
	〃	○18—4	大邱学生選抜	（〃）
	〃	○21—10	延世大	（京城）
	〃	○21—8	光州師範	（〃）
昭37. 6	全日本女	△ 8—8	ベルリン	（西ドイツ）
	〃	N● 4—12	西ドイツ	（〃）
	〃	N● 7—13	〃	（〃）
昭37. 7	〃	○16—7	南バーデン	（〃）
	〃	N● 3—26	ルーマニア	（ルーマニア）
	〃	○16—13	トラークタ	（〃）
	〃	※● 8—17	ハンガリー	（〃）
	〃	※● 7—12	デンマーク	（〃）
	〃	※●10—16	ポーランド	（〃）
	〃	※● 6—15	西ドイツ	（〃）
	〃	●17—18	シビウ	（〃）
	〃	○ 7—5	ファイアンツ	（〃）
	〃	○10—6	メディアス	（〃）
	〃	○18—6	セントギョルゲ	（〃）
	〃	○18—8	全パリ	（〃）
昭37. 7	全日本高校	○22—9	東星高	（京城）
昭37. 9	〃	○17—8	麻浦高	（〃）
	〃	○16—6	養成高	（〃）
	〃	○18—8	大倫高	（〃）
	〃	○14—7	晋成高	（〃）
	〃	△ 7—7	五山高	（〃）
昭37.12	全日本学生	●20—26	ハンブルグ	（西ドイツ）
	〃	●17—27	ブレーメン	（〃）
	〃	●17—19	オエルデ	（〃）
	〃	●16—17	ベッカム	（〃）
	〃	○31—15	エッセン炭鉱	（〃）
	〃	○24—22	YMCA	（〃）
	〃	○14—13	ゲルセン	（〃）
	〃	N●17—26	西ドイツ	（〃）
	〃	○11—7	スイス学生選抜	（〃）
	〃	● 5—12	オッフェン	（〃）
	〃	○10—8	バーゼル	（〃）
昭38. 1	〃	※●15—26	スウェデン	（スウェーデン）
	〃	※●11—34	デンマーク	（〃）
	〃	※● 9—31	スペイン	（〃）
	〃	○25—19	ルンド・マルモ	（〃）
	〃	●20—34	ストックホルム	（〃）
昭38. 1	全日本学生	●16—27	シェランド	（デンマーク）
	〃	●21—24	カルスボイス	（〃）
	〃	●17—27	パリ学生選抜	（フランス）
昭38. 6	全東海学生	○21—14	韓国学生選抜	（名古屋）
	日　体　大	△25—25	〃	（台東体）
	全関東学生	○19—9	〃	（都体）
	桃山学院大	○30—22	〃	（府体）
	全京都学生	○19—16	〃	（京市）
	広島商大	●17—19	〃	（広体）
	下　松　ク	●18—24	〃	（下松）
	徳　山　ク	●19—29	〃	（徳山）
昭38.11	明星学苑高	○19—11	韓国高校選抜	（都体）
	茨城高校選	●18—38	〃	（水戸）
	名古屋 〃	●19—24	〃	（金山）
	兵　庫 〃	●19—22	〃	（神戸）
	大　阪 〃	●17—23	〃	（府体）
	福　岡 〃	●20—37	〃	（小倉）
昭39. 2	全日本男	●17—18	ナント	（フランス）
	〃	○26—23	ソショー	（〃）
	〃	○25—20	リヨン	（〃）
昭39. 3	〃	N●14—27	フランス	（〃）
	〃	○45—5	ストコフ炭鉱	（チェコ）
	〃	N● 7—40	チェコ	（〃）
	〃	※○18—14	ノルウェー	（〃）
	〃	※●10—40	ソビエト	（〃）
	〃	※●12—36	ルーマニア	（〃）
	〃	○14—13	プラハ	（〃）
	〃	○23—10	プラハ学生軍	（〃）
	〃	N●15—23	アラブ連合	（〃）
	〃	○27—19	ロボシチェ	（〃）
	〃	●23—25	ステラ・クラブ	（フランス）
	〃	○22—17	デイジョン	（〃）
	〃	N○20—16	イスラエル	（イスラエル）
	〃	N●11—13	イスラエル	（〃）
昭39. 6	全芝工大	○22—13	ステラ・クラブ(仏)	（早大体）
	全神奈川	●12—16	〃	（横浜）
	千代田印刷機製造	○21—12	〃	（都体）
	全同志社大	○14—9	〃	（京市体）
	全桃山学大	●17—22	〃	（府体）
昭39. 7	全　山　口	●13—20	〃	（下松）
	全　九　州	●17—25	〃	（熊本）
	全　愛　知	●16—26	〃	（金山）
	本田技研	●15—26	〃	（都体）
	大崎電気	●21—16	〃	（〃）
昭40. 3	全　東　京	○38—7	ドイツ艦隊選抜	（駒沢）
昭40. 4	全日本男	●19—29	広州選抜	（広州）
	〃	○30—20	安徽選抜	（〃）
	〃	N●14—26	中　国	（〃）
	〃	●18—26	上海選抜	（上海）
	〃	N●14—26	中　国	（〃）
	〃	●17—19	安徽選抜	（〃）
昭40. 5	〃	N●16—22	中　国	（北京）
	〃	●15—16	北京学生選抜	（〃）
	〃	●12—19	上　海	（〃）
昭40.10	全日本女	※● 9—17	チェコ	（チェコ）
	〃	※● 5—17	〃	（〃）
	〃	○15—12	リトビノフ	（〃）
	〃	○21—4	ビリナ	（〃）
	〃	○21—6	ハラデイチャン	（〃）
	〃	○16—8	トレンチン	（〃）
	〃	○16—9	フロホベツ	（〃）
昭40.11	〃	○14—6	ニトラ	（〃）
	〃	○16—7	ルジアノク	（〃）
	〃	○33—4	アルマトルカ	（〃）
	〃	※● 7—15	西ドイツ	（西ドイツ）
	〃	※○ 6—5	ポーランド	（〃）
	〃	N○12—8	西ドイツ	（〃）
	〃	○14—4	ブレーメン	（〃）
	〃	△ 9—9	ハンブルグ	（〃）
	〃	○16—6	フランクフルト	（〃）
	〃	N○17—13	フランス	（フランス）
	〃	○27—2	U・Sイブリー	（〃）
	〃	○13—8	コロンブス	（〃）
	〃	○16—2	ステラ・クラブ	（〃）
	〃	○12—2	ナント	（〃）
昭41. 9	芝浦工大	○23—21	中国ナショナル	（横浜）
	全　愛　知	●14—24	〃	（愛知）
	全　静　岡	●10—27	〃	（草薙）
	全　大　阪	●13—14	〃	（府体）
	全　兵　庫	●16—31	〃	（神戸）
	京都学生	●14—35	〃	（京都）
	全　福　岡	●13—31	〃	（八幡）
昭41.10	全　山　口	●11—24	〃	（下松）
	全日本N	●17—18	〃	（駒沢）

◉ 昭42. 1全日本男子のヨーロッパ遠征成績は本報告書参照のこと

◉ 琉球(沖縄協会)との交流は国内試合扱いとしましたので省略

VM HANDBOLL
SVERIGE
12–21 JANUARI 1967